

## 織華長屋

寒空の下の意図なき目覚め

おいがつお

とある町の、とある一面に存在する長屋、織華長屋。やや大きな敷地を有するところを除けば、特段めずらしくもない、ありふれた長屋。たまたま織華長屋の前を通りかかったとしても、別に気にとめるほどの場所ではない。

だが、それは、織華長屋に住まう者の正体、ひいては織華長屋の真の姿を知らないからである。

草木も眠る丑三つ刻。

織華長屋の大家、翠姫の部屋からつながる秘密の地下室で、怪しげな会合が開かれていた。

「よくぞ集まった。我が〈織華〉の者どもよ……」

地下室の壇上に立ち、長屋の住民らを見下ろすは、翡翠の着物を着た少女。長屋の大家、翠姫である。

不気味な暗がりの中、翠姫の姿をゆらりと照らす行灯の光。

「我々〈織華〉の力で……人間どもに妖怪の恐怖を、心の奥底まで植えつけるのだ！」

行灯が見せる翠姫の頭部には、狐の耳があった。狐の

しつぽも後ろにある。

そう。翠姫の正体は狐の大妖怪、天狐なのである。

かの化け物を忠義の眼差しで見上げる長屋の住民も、当然のごとく妖怪であった。

人ならざる姿かたちの者たちは、悪の組織〈織華〉の構成員。そして〈織華〉の頂点に立つのが、大首領翠姫。

織華長屋とは、悪の組織〈織華〉が、人の町に潜伏するための隠れ蓑だったのである。

「我が野望のためにも、まずはあの宿敵……カンナギサムライ座天丸を始末する！」

座天丸の名を聞いた織華の連中が一樣に、あの正義の味方の顔を思い浮かべた。

これまで何度となく、〈織華〉の妖怪を倒してきた宿敵。座天丸へ向けられる、妖怪たちの闘争心に呼応するか

のごとく、行灯の光がゆらゆらとゆれる。

「……出でよ、月破！」

翠姫が叫んだ、すると。

ノシ、ノシ、ノシ……

地下に群れた妖怪たちをかき分けるようにしながら、

足音と共に現れた妖怪。

かなりの巨軀だ。肩幅も大きい。右手には、これまた大きな金棒が携えられている。相当な怪力の持ち主でな

ければ、持ち上げることままならない武器であった。  
「お呼びでしようか、翠姫様」

巨体の月破がひぎを折り曲げる。翠姫を見上げる彼の頭からは、二本の角が生えていた。

大力の妖怪、鬼。それが月破の正体だ。

翠姫は目の前の月破よりもずっと小柄であったが、彼女は堂々と、ひざまずいた月破を見下ろす。

「お前に命じる、月破。次なる決闘で座天丸を始末せよ」「ウス！」

太い声で、力強く答える月破。

「うむ」

部下の言葉に、大首領は満足げにうなづく。

「見ておれ、座天丸。次に我々〈織華〉と出会う時が貴様の命日だ……」

ククク、と翠姫の小さな口から、笑い声がもれる。

狐の牙がのぞいた。

ククククク……ハハハツハツハ！

大首領の高笑い（織華）の妖怪たちの心を震わせる。

うねる影。渦巻く妖気。

正義の味方を討つ恐怖の計画が、今、織華長屋の地下室で動き出した。

街のどこにでもある町民たちの住まい、長屋。この織華長屋も、一見すると、ごく普通の長屋にしか見えない。しかし、織華長屋に住む住民たちは、恐るべき正体の持ち主であり、恐るべき力の持ち主であり、恐るべき思想の持ち主であり………

これは、正義の侍と悪の妖怪たちの間でくり広げられた、古き時代の壮絶な大戦を描いた物語である——

もみじ長屋の一室。

薄暗い部屋の中は、ドロボウが入りこんであれこれ放り出したのか、あるいはネズミが小さな町でも作り上げたのか……そうカンちがいしてしまうほどの散らかりっぷりであった。

部屋の中央には、こんもりと盛りあがった布団が一式。

中に何かがいるようだ。

「うむう……」

布団の中身が言葉を発した。それも、どこか寝ぼけたような。

「うむむう……」

布団の内側には、一人の青年が幸せそうにまどろんでいる。

「……ううん…………」

もぞもぞ、もぞもぞ。

青年が無意味に体をゆする。

何をするでもなく、ただただ暖かな布団の中での身じろぎ。

最高のぜいたくであった。

「むにゃ……」

朝方、と呼ぶにはいささか日が高くなってきた頃合いであった。もみじ長屋の他の部屋の住民も、すでに働きに出かけている。

かような時間まで布団カタツムリと化しているのは、この青年ただ一人である。

「くあ……」

あくびをしながら、ようやっと布団をはいだ青年。

ところが、

「……ひええつ、寒い寒い寒い」

すぐに布団で体をくるりと包む。

「この前まで暖かくなってきたと思ったのに。また今日も冷えてきましたね」

ぶるっ、と体を一ゆらし。

「まいっちゃいますよ、もう」

このまま布団の中でとろけそうになっている青年の名は、座天丸。カンナギサムライの異名を持つ、正義の味方である。

正義の味方の一番の使命は、世の平和を守ること。逆に言えば、特に事件がなければやることもない。

今、彼は存分に平和を楽しんで……言い換えるならば、これ以上もないほどぐうたらしていた。

座天丸は寝るのが好きな男であった。その気になれば、お昼まで布団にくるまっていることだってできる。

しかし今、彼も外に出ざるを得ない状況に陥ることとなる。

グウ。

「……むむ」

おなかを押さえる座天丸。

腹の虫が鳴ったのだ。

「朝ごはん食べなきゃですね……」

座天丸は寝ることが好きだったが、それと同じくらい食べることも好きであった。

「ご飯、ご飯……」

布団をかぶったまま、米びつ（お米を保管しておく箱）

の場所までハイハイする座天丸。

「お米を……」

炊こう、と思つて、米びつをパカリ。

「……………あ」

米びつのフタを開けた彼のまゆが、みるみるうちにへの字になつていく。

「お米がない……」

とても悲しそうな顔であつた。

しよげた子犬を思い出させるような座天丸は、日夜悪と戦う正義の味方である。

「……………おなか減つたなあ」

食料が何もないとわかつたとたん、急に腹の虫が態度を大きくし始めた。

ひとまず食べ物を手に入れなければ。

彼は上着を羽織り、部屋の戸を開けた。

「うひゃあ……」

部屋の中も寒かつたが、外はそれ以上だ。

だが、虎穴に入らずんば虎子を得ず。動かなければ、おにぎりを食べることもすらできない。

彼は意を決し、長屋の木戸（玄関）をくぐる。

快眠後の腹ごしらえだ。どこかの飯屋（食堂）にでも行くとしよう。

「天気はいいんですけどねえ」

ついこの前までは、だんだんにお日様の光も暖かくな

つてきていた。このまま一週間もたてば、春らしい気温になると思っていた。

「……………なんですけどねえ」

空こそ晴れ模様だったが、なんだか肌寒い。

こんな天気が、三日は続いているだろうか。

「また冬に逆戻りしちゃうんじゃないかって調子ですよ」  
袖に手を引つこめ、テコテコと歩く座天丸。

「日陰は冷えるなあ……」

早く日なたに出よう、と考えながら、座天丸が通りを過ぎた時のこと。

道のはしっこ、日がよく当たる場所で、やけに両手を

こすり合わせている人がいる。

女性はカタカタと体を震わせており、

「ハーッ……」

両手に息を吹きかけている。

そんなに寒いのかな？

などと遠目で見やっていた座天丸であつたが、

「おっと？」

彼はあわてて女性の元へ駆け寄つた。

少し彼女がふらついたからだ。

「これは危ない」

さすが正義の味方、足は速い。

女がよろけて転びそうになる前に、座天丸はその肩を支えた。

「大丈夫ですか？」

「はっ……」

とつぜん侍に肩をつかまれてびっくりしたのか、目を丸くする女。

「はいっ……」

彼女は自身の衣服の右袖を左手でつまみ、くいと引つ張る。

「あー、びっくりさせてごめんなさい」

女性の肩を離し、あやまる座天丸の瞳に、相手の手の甲がちらと映った。

……おや？ この人は。

「少し具合が悪そうだったので、声かけたんです」

「そうですか……」

そう答える彼女のくちびるは青白い。

「あの、ご心配なく」

立ち去ろうとする女を、座天丸は呼び止めた。

「いやいやいや、さすがに放っておけないです。僕が見てもわかるくらい、あなた、ちよつと弱ってますもの」

先ほど目にとまった、手の甲のアレ。

多分、この人は、人じゃなくて。

「別に斬り捨てようってわけじゃないです。あなたのことを、しばらくめんどう見てくれそうな方を知ってるんです……よかったら、来ますか？」

「……」

「外よりも、家の方が暖かいでしょう」

座天丸の言葉に、しばし考えるようなそぶりを見せる相手。

「本当に大丈夫ですか？」

「ええ。あそこの人たちは親切なので」

屈託のない笑顔を浮かべる正義の味方に、女も少し心を開いたようだ。

「……では、すみません。ご案内をお願いします」

女は水巳と名乗った。

「じゃ、行きますか。……えーっと、つらいなら、おぶりますよ」

「いえ、自分の足で歩けます」

などと言っているが、水巳の足元はどうにもおぼつかない。

座天丸は、カタカタ震える娘の肩に、脱いだ自分の上着をかけた。

「大した距離じゃないですから。調子が悪いならムリをするべきじゃないです」

自分の背中を回した彼は、水巳の前でひざを折る。

「じゃあ……お言葉に甘えます」

けっきょく彼女は相当まいっていたようで、座天丸によりかかるようにして、背中にもたれる。

「甘えられました」

飯屋で朝ご飯を食べたかったが、進路変更だ。  
座天丸は水巳を背負い、長屋への道を進み始めた。  
目指す長屋とは、自分の住まいたるもみじ長屋ではない。また別の長屋……この女性と同じような住民が暮らす長屋である。

「……ふう、ふう」

たっぷりのお茶が入った湯呑みに息を吹きかけているのは、翡翠の着物を着た少女であった。

だが、ただの少女ではない。ゆったりと座る彼女には、狐の耳としっぽが生えている。

織華長屋の大家の部屋にいる、狐の妖怪の名は翠姫。泣く子も黙る悪の組織〈織華〉が大首領である。

しっぽをゆらし、湯呑みにゆっくりと口をつける翠姫。顔にかかる湯気が、どうにも心地よい。

そして悪の大首領は、両手で湯呑みをかたむけた。

ズズズ……

体の芯から温まるのを感じる。

「うむ、寒い日にはお茶がうまい」

すでにきゆうすが置かれたお盆の上に、翠姫は湯呑み

を戻した。

「今日も冷えたなー」

今朝にはお米をといだが、その水のなんと冷たかったことか。

あったかいものが飲みたくなっていた翠姫は、朝のアレコレが落ち着いた後、すぐにお茶を淹れ始め、自分の部屋でゆったりとくつろいでいた。

〈早寝早起き〉

今月の織華の抱負である。

「早起きは三文の徳と言う。諸君、いつもよりも、十分でいい。少しだけ、今月は朝早く起きてみようではないか」

今月初めの悪の会議、翠姫は〈早寝早起き〉とつづつた紙を広げ、部下たちに抱負を告げた。

その紙は、今は翠姫の部屋のカベに貼りつけてある。大首領たるもの、自身でかかげた組織の取り決めには従い、他の者への手本とならねばならない。

ふだんであっても早起きの翠姫だが、今月はさらに早起きになっていた。

「いいものだ。早起きは時間によゆうを生む」  
翠姫はもう一度、湯呑みを口に運ぶ。

ズズズ……

ううむ、これぞ小さな幸せだ。

満足そうに翠姫がしつぽをゆらゆらとさせていると、

「翠姫さん、いますか？」

という声と共に、部屋の戸が叩かれる。

聞きなじみのある声であった。

「開けていいぞ」

翠姫は座ったままで答える。

ガラリ。

と、戸を開けた者は。

「……お、おい。その背中のヤツはなんだ、座天丸ざてんまる」

翠姫が立ち上がり、早足で玄関に向かう。

目の前にいるのは、カンナギサムライ座天丸。我らが

織華の宿敵である。

だが、そんなことは今、どうでもいいだろう。そもそ

も、彼が織華長屋にあいさつに来るのはしよっちゅうだ。

気にすべきは、座天丸が連れてきた人物の方である。

「その女、ずいぶん具合が悪そうだが……」

「そうなんです。ちよつと、ここで診てもらいたくて。

ふつうのお医者さんとかに連れてくのも、その」

「あー……？ あー、そうだな、わかった」

悪の大首領は、すぐにこの女の正体にピンときた。

「とりあえず、私の部屋に寝かせておこう。広いし、こ

れから布団を出すからな、と言って、翠姫は枕屏風まくらびょうぶ

(寝具を隠すために使う、小さな屏風)をどかし、

「よっこいしょ」

自分の布団を持ち上げた。

「水巳さん、水巳さん。あったかい布団で横になりまし

よう」

座天丸の声で、うとうととしていた水巳の目が開いた。

「お茶も用意するぞ」

布団を敷き終わった翠姫と、水巳の目が合う。

するとどうだ、

「キッ……！」

水巳の顔が、たちまちのうちに恐怖でゆがんだ。

「……キッ、キツネツ！」

「あつ」

しまった、という表情になる翠姫。

「いや、待て。たしかに我は狐の妖怪だが」

耳としつぽを動かしながら、翠姫は弁明をする。

「別にお前が蛇であつても、取って食ったりしないぞ」

翠姫が言い終わるころには、水巳の顔かたちは、まっ

たく人間のそれではなくなっていた。

は虫類めいたまん丸の瞳。顔をおおうウロコ。

水巳は人ではなかった。

蛇が化けていたのだ。

「安心してください、水巳さん」

背中におぶつた者は完全に異形と化していたが、座天

丸は少しもおどろく様子がない。

「この狐の方……翠姫さんのことは、僕もよく知ってますからね」

「……私が蛇だつてこと、わかってたのですか？」

「初めて会った時、手の甲にウロコが浮かんでました。完全に人に化けるのもたいへんなくらい、弱ってたんですね」

水巳の疑問に返しながら、座天丸は布団の上に彼女を下ろした。

「我は涼霜を呼んでくる。座天丸、この者にお茶を淹れてやってくれ」

「わかりました」

「お湯は沸かしてあるからな」

部屋を出て行った翠姫。

正義の味方を自身の部屋に残す彼女は、悪の組織の大首領である。

さて、ほどなくして、大首領翠姫は、白い髪かみの女を連れてきた。

「この方ですか、翠姫様？」

「そうだ。お前の知恵を借りたい」

翠姫と共にやってきた女は、織華長屋の首領補佐しゅりょうほさ、涼霜。

「こいつの容態を診てやってくれ」  
「承知しました」

涼霜は、かけ布団を肩からかぶって座る水巳の腕を取った。

「少々失礼」

脈を確認する涼霜。

「……」

しばしの無言の後、

「……大きく体調を崩くずしてはいませぬね。一日安静にしていれば、すぐに治なると思います」

と、彼女は言った。

ホツ、と息をつく一同。

「あなた、化生けいせいとなつてから日が浅いでしょう」

「はい」

「冬眠は？」

「していません」

蛇は冬眠をする生き物である。水巳も蛇の姿で、土の下で眠っていたのだ。

「最近、暖かくなつてきたので目を覚まして。なのですが……」

「再び寒い日が続いてしまった。それで、体の調子がおかしくなつてしまったのですね」

「ふうむ。やっぱりそういうことだったか」

涼霜の診察に相づちを打つ翠姫。

「蛇は冬に弱いからな。妖怪になつても、多少は寒さによる影響が出る。なりたてならば、なおさらだ」



生まれついで妖怪と、動物が長生きをするなどして後天的に誕生する妖怪。水巳は後者の妖怪であった。

「他に必要なものはないか、涼霜？」

「体を温めていれば問題はありませぬ。布団があれば十分かと思いますが……念のため、綿半わたはんても用意しておきましょう」

「うむ」

翠姫はうなずき、水巳に向き直った。

「水巳よ、しばしくつろぐがよいぞ……」

悪の組織の大首領からの、寛大かんだいなお言葉。そのお言葉の最中。

グウウウウ……

「……」

盛大に鳴ったのは、座天丸の腹の虫であった。

「いやあ、ありがたいありがたい」

翠姫の作ったでっかいおにぎりを、幸せそうにほおばる座天丸。

これで三つ目だ。

「ふえふああらふあひふおはへへふあふあつふあほおへ」

「口に物をつめながら話さない！」

翠姫にびしやりと言われ、座天丸はごくりとおにぎりを飲みこんだ。

「今朝から何も食べてなかったもので。ありがとうございます」

「お前はちゃんと朝に起きないから、朝ご飯を食べ損ねるのだぞ、まったく」

翠姫がカベに貼った〈早寝早起〉の文言を指さす。

「今月の織華の抱負だ。座天丸もマネるがよい」

「いやあ……ぼくはけっこうです」

翠姫が悪の抱負を布教する相手は、正義の味方である。

「すみません。ご飯までいただいてしまって」

その横では、水巳もおにぎりをつまんでいた。

「気にするな。食欲があるなら何か食べるのが、体にもよいのだ」

この様子なら明日には元気になるだろう。

「ごちそうさまでした」

しばらくして、両手を合わせる座天丸と水巳。

「お粗末様だ」

再び湯を沸かしていた翠姫が返す。

「では、ぼくはこれで失礼しますね。水巳さんのことは任せていいですか？」

「うむ、任されたが……もう帰るのか？ 茶でも飲んでいけばいいのに」

「いえいえ、もう十分ご飯をもらっちゃったので」  
立ち上がる座天丸。

「水巳さん、早く良くなるといいですね」

「はい……ありがとうございます、座天丸さん」

「僕はただここに連れてきただけです。お礼は翠姫さんと涼霜さんに言ってください」

それではおじやました、と草履をはく座天丸に、  
「そうだ、座天丸」

翠姫が声をかける。

「明日のことは覚えてるよな？」

「そりやもちろん」

「……クッククク。ならばよい、楽しみにしている」

ニヤリと不敵に笑った翠姫。その顔は、背を向けていた水巳には見えなかっただろう。

「はあい」

そんな怪しい笑みに対し、座天丸はのんきに返す。

そして、彼は織華長屋を出て行った。

大家の部屋に残ったのは、翠姫に涼霜、水巳の、妖怪

三人組である。

「ひと眠りするか、水巳？」

小さくあくびをする水巳に、翠姫がそう言った。

「えっ、あっ」

水巳は少し顔を赤くする。

「ワハハ。寝ておけ寝ておけ」

「……はい。ありがとうございます」

最初は野生の本能で翠姫をおそれていた水巳だったが、すっかり警戒心も解けたようだ。

翠姫に貸してもらった布団で横になった水巳は、やがて寝息を立て始めた。

「……これで多少は落ち着きましたね」

「そうだな」

翠姫と涼霜は、二人で並んで茶をすする。

「水巳さんのことを見て、私の昔を思い出しました」

「すまん。涼霜自身の経験から助言を聞きたくて、今回お前を呼んだんだが……」

「いえ、不快には思っていない。お気になさらず」

涼霜は雪女だ。吹雪をあやつる妖怪である。

主に寒冷な場所に住む雪女は、暑さに弱い。まだ幼か

った涼霜は、それで苦労させられたのだ。

寒さに弱い水巳とは正反対ではあるが、同じく気温に

振り回された経験のある涼霜ならば、何か良い知恵を持

っているだろう。

翠姫はそう考え、涼霜を連れてきたのである。

「ただ、水巳さんにも早く元気になつてもらいたいと、

そう思っただけです」

今でこそ、夏でも活動できる涼霜だが（昼には長屋の

みんなでスイカを食べるし、夜には川へ花火も見に行く）、

小さい頃は雪山から外にほとんど出ることはなかった。

「水巳さん、座天丸さんに拾ってもらえたのは幸運でしたね」

「だな。ヤツにはあとで礼を言っておこう」

悪の妖怪二人は、宿敵に感謝の弁を述べる。

「自身でどうにもできない体質で苦しむのは、とてもつらいことです。私にはよく理解できません」

ふだんはあまり自分のことを語らぬ涼霜だが、翠姫や一部の妖怪の前では、少しばかり口数が増える。

「ですが、近くにたよれる人がいただけで、ずいぶんと心が楽になったものです」

涼霜の胸中には、一人の妖怪の姿があった。

「……百助か。お前は、ずいぶんあいつの世話になったとは聞くが」

「はい。あの方には、感謝してもしきれません」

百助。織華長屋で暮らしている際は、首から上だけを、紫色の甲殻を持つムカデのそれにしているが、本性は巨大なムカデである。妖怪オオムカデの彼は、悪の組織〈織華〉の最年長だ。

そんな彼はかつて雪山で、まだ非力な涼霜の世話をしていたらしい。

「百助さんがいなくなったら、私は翠姫様に会う間もなく、この世を去っていたでしょう」

一年を通して涼やかな山の中に住んでいても、夏の日には、涼霜は熱を出して寝込む時がままあった。涼霜は、

とりわけ病弱だったのだ。

こういう時、百助は山の頂上付近まで登り、雪や氷を二人の住みかまで持ち帰ってきてくれた。

「がんばれ」

横になった幼き涼霜の額に、彼は氷を包んだ手ぬぐいを優しく当ててくれたものだ。

「がんばれよ、涼霜」

彼のその言葉、声色は、織華の首領補佐となった現在でもはつきりと思いだせるほどの、近くて遠い記憶である。

「……」

涼霜の視線の先には、すうすうとよく眠る水巳。かつての自分の姿と、無意識に重ねてしまう。

「ともかく、彼女が回復するまでは、私が面倒を診ます」

「よろしくたのむぞ」

「はい。翠姫様は、明日の準備をなさってください」  
そう、実は翠姫には、とても大切な用事が明日に控えているのだ。もっと正確に述べると、織華の大首領として大切な用事である。

「じゃあ、後はたのむぞ。水巳が起きたら、長屋の空き部屋まで案内してやれ。たしか布団もあったはずだ」

「承知いたしました」

「明日の準備をするのはその後だな。こいつも妖怪だが……織華の一員ではない者に、私の仕事を見せるわけに

はいかぬ」

翠姫が部屋の文机の引き出しを開ける。

〔座天丸剿滅計画〕

二重底になった引き出しの中には、世にも恐ろしい言葉の書かれた本が一冊、隠されていた。

龍休山は、町から少し離れたところにそびえる、どこか雄大なたたずまいをした山である。

今宵、龍休山のふもとへと歩を進める、一人の侍がいた。

ほおをなでる風は暖かいが、しかし何か不吉な予感を抱かせる。

このまま前進を続ければ、ただならぬ戦いが待ち受けているだろう。だが、そのために彼はここへ来たのだ。

「クッククック……」

風と共に、邪悪な笑い声が聞こえる。

ひるまず歩を進める侍。

「よくぞ逃げずにやってきた……」

龍休山には先客がいた。

翡翠の着物を着た少女。

無論、こんな時間に町の外にいる少女だ、単なる娘ではない。

狐の耳としっぽを見れば、一目瞭然である。

「会えてうれしいぞ……我らが宿敵、カンナギサムライ座天丸」

自分の名を呼ぶ天狐……翠姫は、愛らしい背丈に似つかわしくない、おどろおどろしい妖気を放つ。

「……」

そして、翠姫を守るように立つは、巨軀の鬼。

織華が戦闘員、鬼の月破の右手にかかげられた金棒は、翠姫の身長よりも大きい。これが脳天に振り下ろされれば、座天丸といえどもただではすまぬ。

敵は天狐と鬼だけではない。

「フシャアア……」

座天丸に威嚇をくり返す、三体の二足歩行のネコもいる。

妖怪猫又のもの正体は、織華のしたつぱ戦闘員、シロ、シマ、シケ。

彼らに向けて、油断なく右足を一步、座天丸が動かす。

悪の組織（織華）から、果たし状を送りつけられた座天丸は、挑まれた決闘に応えるべく、こうして龍休山へやってきたのである。

「座天丸よ。お前はこれより、我が織華の妖怪たちによ

つて討たれる。春一番の後でも追い、この世から消え去るがよい」

大首領の演説を耳にした、部下たちの士気は高い。

月破の腕の筋肉がもりあがり、猫又たちの毛が逆立つ。妖怪たちの殺気に答えるかのごとく、座天丸は刀に手をかけた。

「さあ、我がかわいい部下たちよ……」

翠姫の瞳が、強敵の姿をしっかと捉える。

「――行け！ 座天丸を滅ぼしてやるのだッ！」

龍休山のふもとで、人知れず決闘が行われた次の日。

おとといまでの寒風はどこへやら、ボカボカ陽気がふり注ぐ織華長屋の木戸の前には、数人の人影があった。

「皆さま、本当にありがとうございます」

「うむ！ 元気になってなによりだ！」

水巳の言葉に答えるのは、織華長屋の大家、翠姫。

「健康が一番ですからねえ」

翠姫のとなりには、座天丸の姿もある。

昨日の夜、決闘を終えた帰り道、水巳のことを気にか

けていた座天丸は、翠姫にこうたずねた。

「翠姫さん、水巳さんの様子はどうですか？」

「問題ないぞ。ご飯もちやんと食べてた」

「おお、安心しました」

夜の町を歩く一団は、翠姫ら織華の面々と、カンナギサムライ座天丸。

「明日にでも、僕も彼女に会いに行つていいですかね？」

「もちろんツス。水巳さんも、きっと喜ぶツスよ」

金棒をしまった、革の武器袋をかついだ月破がにこやかに言う。

「水巳さん、座天丸さんにありがとうございますって言つてたにや」

シロの言葉に続けて、

「ぜひ会つてあげてほしいニヤ」

「ほしいにやあ」

にやあにやあと同意したのは、シマとシケ。

決闘は座天丸の勝利に終わった。悪との戦いを終えた彼は、次の日――つまり今日、水巳のお見舞いのために織華長屋に行くと、翠姫に伝えた次第である。

「よもや人間の方に助けられるとは、思つてもみませんでした」

「慣れてますからね。妖怪の方には」

座天丸を見つめる水巳の顔色は、すっかり健康的に血が通つたそれとなっている。

「翠姫様、涼霜さん、それに織華長屋の皆さま。二晩も

の間、どうもお世話になりました」

今度は織華の者たちに頭を下げる水巳。

彼女の見送りに来たのは、織華の大首領翠姫に、特に水巳の世話を焼いていた涼霜、それから手の空いていた猫又三匹衆。

この五人以外の長屋の住民らにも、水巳は色々と目をかけてもらっていた。

三日間の織華長屋での養生生活は、妖怪になったばかりの水巳の心に、十分なほどに刻まれたであろう。

「こたびの恩は忘れません」

「ええ。お元気で」

涼霜の言葉に、水巳は最後にもう一度頭を下げ、織華長屋を去っていく。

「達者でにやあ」

「元気でニヤ」

「何かあったらいつでも来るにや」

そんな彼女に手を振る猫又たち。

「……翠姫さん、皆さん。今回はありがとうございます。僕からお礼を言わせてください」

一体の妖怪が見えなくなった後、座天丸が翠姫に告げた。

「ワハハ、当然のことをしたまでよ」

翠姫が笑う。

「こつちこそ、昨日は決闘、ご苦労であった」

「はい」

「今度こそはお前を倒してやるぞ。覚悟するがよい」

「楽しみにしています」

悪の大首領の宣言に、カンナギサムライはニコニコとしながらそう言った。

「ほう。水巳は無事に旅立ったか」

水巳を見送った日、涼霜は、夕飯を共にしないかと、織華の最年長、オオムカデの百助を誘った。なんとなく、そういう気分だったからだ。

一日の最後に、百助の部屋で食卓を囲み、長屋を去った蛇女の話をする、雪女とオオムカデ。

「それはよかつたな」

「はい。昔の私よりは、ずいぶん丈夫そうな方でしたし……彼女も年を経て、安定した妖力を得れば、冬に悩まされることもなくなるでしょう」

自分自身がそうだったように、彼女も多少は苦労をするかもしれない。

雪山での生活を思い出す涼霜。

あの時、自分には百助さんがいた。

水巳にも織華長屋という、いざという時のたよる場所ができた。

「もう心配はいらないかと」

「そうか」

みそ汁を飲み終えた百助は、おもむろにハシを持つ手を止めた。

「……涼霜」

雪女の名を呼ぶ百助。

「なんですか、百助さん？」

「よくがんばったな、えらいぞ」

「……」

百助の言葉に、涼霜はわずかに固まる。

「……百助さん。幼子をほめるような口ぶりは、その、いかななものかと」

「言ってみたくなっただけだ。たまにはいいじゃないか、〈織華〉の首領補佐殿？」

クツクツと笑う百助に対し、ちよっぴりすねたように横を向く涼霜であった。

これは、正義の侍と悪の妖怪たちの間でくり広げられた、古き時代の壮絶な、そう、壮絶な大戦を描いた物語である――